

# オリエンテーリングは自然破壊？

## 人間のカーニバル、環境保全を理由に中止される

私たちは、「漠然とオリエンテーリングは自然に親しむスポーツ」というイメージを持っている。しかし、一般社会の中で、このイメージは必ずしも共有されたものではない。この春、入間市オリエンテーリングクラブの恒例行事「カーニバル」が中止になった。理由は、環境保全であった。

オリエンテーリングは、果たして、環境への意識が高まる今後、アウトドアスポーツとして生き残っていくことができるのだろうか？

「日本の杉の生産量が減少、原因はオリエンテーリングに！」

この新聞記事を発端に森林を荒らすオリエンテーリングが国会でも問題に。ついにオリエンテーリングを禁止・取り締まる「山野跋涉による森林破壊を防止する法律」が制定・施行。残された熱心な隠れオリエンティアは、歌舞伎町にある裏地図屋に群がり、密かに山武や飯能の森を走っては、警察に挙げられる。

早稲田大学の会報に、こんな近未来の仮想ストーリーが掲載されたことがある。10年ほど前、この話をジャーナル・オブ・オリエンティアに掲載した時、ただその話の展開のおもしろさに引かれた。しかし、今この話は決して仮想の話ではないリアリティを持ってきている。

私のお気に入りの大会の一つである、春の恒例行事「入間のカーニバル」が今年も中止になった。その理由を入間オリ

エンテーリングクラブの会長、田中博氏が次のようなメールで知らせてくれた。

### 加治丘陵祭りの柱だった 入間市オリエンテーリング 大会

「参加者100人程度の入間市オリエンテーリング大会として始め17回を数え、名称もOL大会からOLカーニバルに参加者も500人を超え、家族で楽しめる大会でありながら、競技性もある程度のレベルを保った大会として地域クラブの特徴をだしてがんばってきました。この大会が大きくなると共に入間市OLCも大きくなってまいりました。大会を定期的に関催することによりクラブが育てられたといっても良いと思います。

2年前より加治丘陵まつりとしてオリエンテーリングだけではなく加治丘陵の良さを市民に知ってもらい、加治丘陵の保全に役立て又スポーツと文化の融合、老青少の三世代の交流等を目的としたより大きな祭りとしたい、ということで、それまで青年会議所と入間市OLCの2団体により組織していた実行委員会の構成団体に入間市みどりの課、教育委員会体育課、老人クラブ連絡協議会、ボーイスカウト子供会育成会等の団体に参加してもらいました。そしてOLはその加治丘陵まつりの柱のひとつとなったのです。

### 「オリエンテーリングは環境 破壊！」の声あがる

時を同じくして入間市では加治丘陵を里山としてどのように保存活用していくのか、土地の公費による買取を含め自然保護と活用の両面から生態系の調査を行い入間市としての加治丘陵に対

する取り組みの大枠をきめました。そのなかで大鷹の生存やほたる、そのほか貴重な動物・植物の生息が確認されました。そしてできるだけ学術的に研究するように現状を保護保存すべき地域と自然に人々が接する機会をふやす自然公園地域とにわける構想が基本政策として決定されました。生態系の調査にあたった学者の意見としてOLは自然を舞台として活動するが、トリムOはまだしも、競技としてのOLは自然を見るところか普段人の入らないところにも入り、動物を驚かし、植物を踏みにじり、OL道を作り、自然保護にとってはよくないスポーツである、との意見がでてまいりました。勿論我々としては今までの加治丘陵でのOL活動を25年おこなってきたにも拘わらずこれだけの自然が保全されてきたことは、学者先生が指摘するようなことはない。それよりも健全なスポーツとして青少年に良い影響を与え、自然に接する機会の少ない人に加治丘陵を知らせる機会をつくるすばらしいスポーツである。など反論し、かつ練習会などに使われないようにトレインの閉鎖をし埼玉県協会の認めた大会のみに限定しコースは事前に入間市みどりの課に示す、というように協力してきました。またみどりの課が主催する下草刈にクラブとしても協力し、加治丘陵まつりのなかで、加治丘陵の自然に関する展示コーナーを設けるなど努力してまいりました。

### 芽吹き時期はオリエン テーリングを自粛へ

そういう全体の動きのなかで、入間市みどりの課はつねに関催時期、つまり4月という芽吹き・繁殖のさかんな時期だけは道だけを走るとは限らない個人のOLはやめてほしいと主張していました。昨年秋、2001年の加治丘陵まつりの方向について青年会議所より、OL

の競技部門を縮小してもっと普段加治丘陵に入らない人を加治丘陵に呼び、自然に接する機会をつくり、またこの入間市の宝でありひいては日本の宝である都会の近くに残された自然を21世紀に残すために、入間市及び近隣の市町村の人々の関心を高めるような加治丘陵まつりとしてほしいという趣旨の提案がありました。それから最近まで、何回も話し合いがあったのですが、結論として青年会議所の主張を受け入れ、加治丘陵まつりとしてはOLはトリムのグループだけを行う事として時期は4月1日となりました。従来よりも地元密着型の自然保護・観察・体験学習などを主にした傾向の強いまつりとなるでしょう。」

## 問われる、オリエンテリング界の対応

この文面からも、入間市OLCが、地元との協調関係に多大な注意を払い、また自然保護に対しても積極的に配慮してきた事実が伺える。そのクラブにして、「オリエンテリングは自然保護にとって好ましくないスポーツである」という一種のイメージの前にはなす術がなかったのである。

自然保護への関心の高まりから、近年、極端な保護論を唱える団体や識者がいることは事実である。そして多くの場合、針葉樹の植林地で行われるオリエンテリングでは、保護に値するような動植物への直接的な被害はほとんどないはずである。しかし、他人の土地を使うオリエンテリング側には選択肢はない。だめと言われたら、その根拠が現実のものかどうかには関係なく、その場所でのオリエンテリング活動は不可能になる。それが、こうして現実のものとして突きつけられているのである。

こうした実状に、私たちオリエンティアはどう対処していけばいいのだろうか。一つの答えは東京農大の木俣君が中心になって行われているような森づくり、自然観察とのタイアップである。私たちは、自然を舞台に活動している割には、田中氏のレポートの引用にもあるように、自然をゆっくりと味わったり、ま

たそれについての理解を深めている訳ではない。たとえば、私たちが、「スーパーA」の林と称している通行可能度の高い森林が、どのような手を経て現在の状態に達しているかを知っている人がどれくらいいるだろうか。またそれらが、手入れの行き届いた植林であるという側面と、手入れ不足で林内に光が入らなくなった結果であるという側面があることを知っている人がどの程度いるだろうか。こうしたことにオリエンティア一人一人がもっと関心を高め、高めるような努力が必要だろう。

富士地区は数年前に、台風により倒木の大量被害を受けた。その倒木は今でも完全には片づいておらず、そのため、トレイルの一部はオリエンテリングには適さない状況になっている。こうした倒木は放置すれば森林のためにもよくない。しかし、近年林業の担い手は減り、割に合わない森林経営は十分に行われていない。日頃富士でオリエンテリングを楽しんでいたオリエンティアが地元の森林組合に協力して、森の倒木を片づける。何十年かたった時、子どもや後輩たちに、「この森の今ある姿には、僕らも一役買ったのだ」と言えたら、なんと素敵なことだろう。

自然との触れ合いに関して、オリエンティアの中には必ず潜在的なニーズがあると思う。私が1993年依頼行っている調査でも、大学でオリエンテリングクラブに入る人の中には自然との触れ合いに関心を持っている人たちが少なからずいる。そして実際のオリエンテリングが、そのニーズに十分応えていないことも確かである。オリエンテリング側からの森づくりや自然保護とのタイアップの活動は、こうした内部的な潜在的欲求を満たすことにもなるだろう。

こうした、一種ムードメーカー的な活動に加え、オリエンテリングが実際にどの程度森林や自然に影響を与えるかという地道な調査も必要だ。森林所有者はともかく狩猟者との確執が強いヨーロッパでは、オリエンテリングが環境に与える影響に関するいくつかの文献があり、またそれをテーマとするシンポジウムも行われている。気候や植生の違う

日本では当然異なる影響が予想される。こうした予想を、現実のデータで裏付けておくことは、オリエンテリングが自然破壊的であるという誤ったイメージを生み出すのを防いでくれるだろう。

前回、前々回のオーマガジンでは、オリエンティアの出すごみのもたらず問題が取り上げられた。問題はゴミだけでなく、周囲との関係に関するあらゆる分野に及んでいる。ゴミ問題で白戸氏が主張したように、これはオリエンテリングの危機であると同時に、社会的なアピールをするチャンスでもある。私たちが、そして、私たちの後輩たちが、公園の中でしかオリエンテリングができなくなったり、歌舞伎町でこそりO-Mapを買わずに済むよう、私たちの意識的な行動が求められているのである。